

Title	資本主義精神論：サムエルスン「宗教と経済活動」を中心にして
Sub Title	Professor Samuelsson on "The protestant ethic and the spirit of capitalism
Author	中村, 勝己
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.2 (1966. 2) ,p.187(77)- 194(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19660201-0077
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660201-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(注63) 椎名重明「農業における産業資本の形成——とくにイギリスの場合について——」(大塚・高橋・松田編著『西洋経済史講座』II)二二八—九頁参照。

(注64) ノウルズもこれを認めて「イングランド及びウェルズ全般にわたり、土地譲与の主要な結果が、富裕なヨーマンたちと、カン・トリン・シエントルマンの二・三男たちとの地位の向上であったことは既に明白である」と述べている。(Knowles, op. cit., p. 399) (傍点筆者)

(注65) C. Hill, Puritanism and Revolution, 1958, p. 40.

(注66) ヨーマンについては、最終的な土地受領者についての組織的検討が可能な史料がないため、個人史料について、個々の場合を単発的に知るだけであるが、キャンベル(M. Campbell)のように大胆な結論を出している場合もある。それはこうである。「多分、ほとんどのヨーマンは、解散後間もない年代に、修道院領の譲渡によって利益を受けなかった。というのは、この土地はまず大土地保有者に、贈与または諸奉仕の提供を条件として譲られるか、売却されるかしたからである。しかし、その大部分は間もなく投機業者の手に入り、市場に出、そこにおいて分割・再分割され、十六世紀の終りまでには、小規模な買手の手とどくところにもたらされた。」(ヘンリー八世は王室の利益をはかるために解散をおこなった。しかし、そうすることによって、彼は来るべき一〇〇年間、農業の発展を形成する手助けをし、それによって、間接的にはあるが、ヨーマン階級の成長に寄与したのであった。)(M. Campbell, The English Yeoman under Elizabeth and the Early Stuarts, pp. 70-71.) (傍点筆者)

(本稿は高村象平教授の指導の下に作製された修士論文の一部である。)

学界展望

資本主義精神論

——サムエルソン「宗教と経済活動」を中心にして——

中村勝己

が国のヴェーバー研究が科学方法論を、しかも「客観性」を中心にして、とりあげて来たのに対して、近年はヴェーバーの全業績の中に、方法論の適用形態を、否、方法自体を見て行こうとする傾向があらわれてきた。社会経済史系列の著作は、わが国でも比較的早く紹介・利用されてきたが、近年は「支配の社会学」と「宗教社会学」の邦訳の進行とその研究が現われて来て、ヴェーバーの個々の著作を断片的・孤立的に利用するのではなく、「ヴェーバー的課題」を全体として受けとめようとする方向に進みつつあるように思われる。

注(1) 「中世商社会社史」「古代文化没落の社会的要因」「都市」「古代の農業事情」「農業制度と資本主義」など。

(2) 世良晃志郎訳「支配の社会学」(I)・(II)、創元社刊。

(3) 大塚久雄・生松敬三訳「世界宗教の経済倫理——序論——」(1) (2) (3) (みすず書房「みすず」第64、65、66号)、細谷徳三郎訳「儒教と道教」をはじめとして、杉浦宏訳・中村元補注「世界宗教の経済倫理」II、「ヒンズー教と仏教」(1) (みすず書房刊)、内田芳明訳「古代ユダヤ教」(1) (2) (みすず書房刊) など。

一九六四年はマックス・ヴェーバー生誕一〇〇年にあたり、それを記念して、わが国でも、六三年春には慶應義塾大学で経済学史学会主催のシンポジウムが開催され、同年秋には「思想」、翌六四年夏には「理想」がそれぞれマックス・ヴェーバー特輯号を出したし、六四年十二月には東京大学で「マックス・ヴェーバー生誕百年記念シンポジウム」が開催された。六五年には大塚久雄、安藤英治、住谷一彦、内田芳明著「マックス・ヴェーバー研究」(岩波書店刊)、安藤英治「マックス・ヴェーバー研究」(未来社刊) および大塚久雄編「マックス・ヴェーバー研究——生誕百年シンポジウム——」(東大出版会刊) が相次いで出版された。これらの研究によってわが国のヴェーバー研究の水準は飛躍的に高められた。従来のお

「近代ヨーロッパの文化世界に生を享けた者が一般歴史的諸問題を探究するとき——少くとも我々は、そう考えたい処であるが——普遍的な意義と妥当性を発展せしめたる如き文化諸現象が、

偶々西洋において、しかも西洋のみに於て、出現したというのは、抑々如何なる条件の連鎖によつていたか、という質問を發せざるを得ないのは、不可避にして当然なことである。⁽⁴⁾とヴェーバーがいつた場合、ヴェーバーがその醒めたる眼をもつて見すえようとした近代西洋文化は、どのような歴史的状況にあつたのであろうか。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」」のよく知られた末尾において、彼はひたむきに「合理化」を追求して行つた近代西洋社会の文化状況を次の如く理解している。やや煩雜にわたるが、以下引用して見よう。

「ヴェーリタンは職業人たらんと欲した。——われわれは職業人たらざるをえない。何故というに、禁欲は僧房から職業生活のただ中へ移され、世俗内の道徳を支配しはじめるとともに、こんどは、機械的生産の技術的・経済的条件に縛りつけられていゝ近代経済組織の、あの強力な世界秩序を作り上げるのに力を添えることになつた。が、この世界秩序たるや、圧倒的な力をもつて、現在その歯車装置の中に入りこんでくる一切の諸個人——直接に経済的営利にたずさわる人々のみでなく、——の生活を決定しており、将来もおそらく、石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで、それを決定するであらう。バックスターの見解によれば、外物についての配慮は、ただ「いつでも脱ぐことのできる薄い外衣」のように聖徒の肩にかかるに止めねばならなかつた。それなのに、運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い外枠と化せしめた。禁欲は世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試み

たが、そのために世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力となり、ついには逃れえない力を人間の上に揮うにいたつた。今日では禁欲の精神は——最終的にか否か、誰も知らない——この外枠から抜け出てしまつてゐる。ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立つて以来、この支柱をもう必要としない。禁欲の朗らかな後継者たる啓蒙主義の薔薇色の雰囲気さえ、今日ではまったく失せはてたらしく、「職業義務」の思想はかつての宗教的信仰の亡霊として、われわれの生活の中を巡りあるいてゐる。今日この「使命たる職業の遂行」が直接に最高の精神的文化価値に関連せしめられえないところでは——或いは、同じことだが、主観的にも端的に経済的強制としか感じられないところでは——各人はその意味をおよそ詮索しようとしなれないが通例である。今日営利のもつとも自由な地方であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味をとりさらされてゐるため、純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果スポーツの性格をおびるにいたることさえ稀ではない。将来この外枠の中に住むものが誰であるのか、そして、この巨大な発展がおわるべきには、まったく新しい預言者たちが現われるのか、或いはかつての思想や理想の力強い復活がおこるのか、それとも——その何れでもないなら——一種異常な尊大さでもって粉飾され機械的石化がおこるのか、それはまだ誰にもわからない。それはそれとして、こうした文化発展の「最後の人々」にとっては、次の言葉が真理となるであらう。「精神のない専門人、心情のない享楽人。」

この無^モのものは、かつて達せられたことのない人間性の段階にまですでに登りつめた、と自惚れるのだ⁽⁵⁾。と。——
ヴェーバーがこの文章を書いて後すでに半世紀以上が経過し、二度の世界大戦と、新しい民族諸国家の誕生と社会主義国の成立、拡大、原子力の開発とその利用、マスメディアの進行、こういった現象が人々を包みこんで、不安の源泉をなしている。彼はこのような状況に「堪える」ことにより、学問の中にそれを緊張においてとらえることが出来たのである。

欧米の学界では近年『プロテスタンティズムの倫理』への関心は強く、ベンディックスの好著を始めとする秀れた研究が次々とあらわれてゐるが、ここで紹介するサムエルソンの新著は特に異色の、かなり激しいヴェーバー批判書である。

クルト・サムエルソンは、一八世紀のストックホルム商人の研究や、ストックホルムの百貨店 *Nordiska Kompaniet* の歴史の外、「一七三〇—一八一五年のスウェーデン商家の国際金融」、「二〇世紀スウェーデンの銀行と産業金融」などについて論文を發表している経済史家であるが、一九五七年「経済と宗教」と題する著書を世に問うた。この書は一九六一年に英訳され、一九六四年「ハーバー・トーチブックス」の一冊として普及し、その「大胆な」結論で注目を受け、我が国でもいち早く好意的評価が与えられてゐる。サムエルソンは次の様に問題を提起する。すなわち、人々を経済的達成^{アチーブメント}に向けたのは宗教(プロテスタンティズムの諸教義)であつ

たか。プロテスタントの諸国は、カトリックの諸国より経済的に成功したか、もしそうだとすれば、宗教がその原因をなし、その差異を生んだのか。北・西欧およびアメリカの経済的発展すなわち「資本主義」は、プロテスタンティズムなしには見られなかつたのだらうか？ これを要するに、サムエルソンの疑問は、プロテスタンティズムは資本主義の発展に不可欠の要因でなかつたのではないか、というのである。

サムエルソンはまず第一章で研究史を回顧し、社会学者 H. E. Barnes, Talcott Parsons 及び Irwin G. Wylie, 経済学者 Eli F. Heckscher, W. Arthur Lewis, 及び Gunnar Myrdal, 文学史家 René Wellek 及び Austin Warren など根本的にヴェーバーの主張を容れている人々と、これに対する批判者としての Felix Raftahl, Werner Sombart, Lújo Brentano, Wm. Achley, R. H. Tawney, H. M. Robertson, A. Fanfani, W. Cunningham, J. B. Kraus, Volmer Clemmensen らの論点を簡単に紹介し、これらの批判者の論点は、第一に、ヴェーバーはプロテスタンティズムと資本主義の発展の関連を誇張してゐて、その一般化は過度である。第二に、両者の関連はヴェーバーの考えた程直接的ではない。第三に、ヴェーバーはプロテスタンティズム以外の諸要因について無知である、という三点に要約出来るが、これらの批判者といえどもヴェーバーの命題ないし問題提起を基本的に承認してゐて、修正ないし補足しているに過ぎない、としてゐる。そしてサムエルソンは、ヴェーバーおよびその批判者に共通の、宗教倫理と資本主義発展との

関連という問題の提起の仕方そのものに根本的な疑問を表明している。

第二章「ピューリタニズムの精神と資本主義の精神」。カトリシズムやルッター主義に比して改革派教会の指導者が経済問題に関心をもっていたとしても、彼らは決して積極的に靈魂の救済にとって益あるものと看做していなかった。勤勉と節約と個人的自由とは勧められたが、その結果えられる富と成功は、靈魂にとって危険であるという、経済活動に対する矛盾した態度が見られた。すなわち、ピューリタンの経済観は資本主義の精神を奨励もせず阻害もしなかった。資本主義の精神は宗教的信仰から全く独立して存在し育ったのである。ただピューリタン諸教派のメンバーが経済的に成功した場合に、彼らが自他の経済活動を出来る限り宗教的に有利に解釈しようとしたから、両者の間になんらかの関連があるかのような印象を人々に与えたと過ぎない。経済的成功や職業労働のエートスと予定説との関連は、後期カルヴァン主義神学者において見られるもので、カルヴァン自身にはそのような関連は認められない。

「資本主義」又は「資本主義精神」は宗教改革のずっと以前から存在した。「イタリヤ商業諸都市やハンザ諸都市、織維工業および鉱山業」は、「宗教信仰の内部ではなく外部」の、「ルネサンスや地理上の発見、アラブ諸王国などの条約、新しい学問中心地の創出、封建制の解体とその大公国への吸収、新しい国家理論」などのさまざまな経済的・政治的・文化的諸要因の所産である。啓蒙主義やニュー・イングランドのアルミニウムは、宗教信仰から教育

を解放した。ベンジャミン・フランクリンはそういう啓蒙主義と世俗化時代の象徴である。彼は勤勉と節約を尊んだが、ピューリタンの職業意識はもっていなかった。「節制 temperance」「沈黙 silence」「整頓 order」「決断 resolution」「儉約 frugality」「勤勉 industry」「真実 sincerity」「正義 justice」「中庸 moderation」「清潔 cleanliness」「平静 tranquility」「謙虚 humility」「純潔 chastity」などの徳目は、ピューリタニズムではなく、啓蒙主義、功利主義との関連において考えらるべきものである。又この種の観念はフランクリンにのみ固有のものではなく、彼以前にもカトリックおよびプロテスタント諸国に広く見られたものである。Leon Battista Albertiの著書 *I libri della Famiglia* (一四五〇年) やフランスのカトリック教徒 Jacques Savaryの著書 *Le parfat negociant* (一六七五年) の経済思想の基調はフランクリンと根本的に相違はないし、真に「資本主義的」で「合理的」である。またアルベルティの思想は当時の広く流布した「資本主義精神」を示すものである。富商ヤーコプ・フッガーの有名な一句についても同様である。この営利欲は「カトリック・フランドル地方の織物業者や輸業者」と同様に、「イタリヤ・ルネサンス諸都市の成功せる商人」にも、又「一八世紀ニュー・イングランドのピューリタン奴隷商人や、一九世紀末および二〇世紀初頭のニュー・ヨーク、ボストン及びシカゴの金融業者」と同様に「ポルトガルの商家」にも、ひとしく見られる。

典型的「*captains of industry*」たるカーネギーやフォードにしても、ニュー・ヨークの大土地投機業者、アスター John Jacob

Astor や鉄道業者ヴァンダービルト Cornelius Vanderbilt についても決してピューリタンの心情をもっていなかった。

第三章では「美德・利子および富」と題して、勤勉と節約といった徳目によって大資本が蓄積されたのではない。資本主義経済の発展を助けた低利子は、プロテスタントイズムだけではなく、カトリックの教説にも見られた。

第四章では、ヴェーバーの問題提起自体がそもそも疑問であるとして、「経済的發展」は必ずしもカルヴィニズムと結びつかず、カトリシズムや宗教的無関心や寛容なども結びついている。所屬教派と実業教育との結合も必然的ではない。

以上で明らかのように、宗教と資本主義精神との関連は、ヴェーバーのいうように単純ではない。事實は複雑であり、「資本主義の出生証明書は、それを研究する歴史家と同様に多い」のだ。ヴェーバーがプロテスタントイズムという特定の要因を他の要因から切離して特に強調し、類似現象との差異を誇張するのは、彼の「理念型」という方法の然らしめたものである。この方法論の弱点に注目する事なく、ヴェーバーに追随する人々の絶えないのは奇妙な事だ、と結論する。

三

サムエルソンの著書は、その歯に衣きせぬ表現によって、問題の所在を（サムエルソンの意図に反して）明確に理解するのに役立つ。彼のヴェーバー批判は次の三点に要約することが出来る。

学界展望

(1) ヴェーバーが「資本主義の精神」としている「勤勉」とか「節約」とかの徳目は、必ずしもプロテスタントイズムに固有のものではなく、他の時代の他の教派にも見られ、カルヴァンの「予定説」とは結びつかない。

(2) 「資本主義的」「経済發展」はプロテスタントイズムの弘布した地域にのみ見られたのではなく、カトリックの地域にも見られた。また「産業指導者 *captains of industry*」はプロテスタントイズムに親和性を示していない。それ故に、経済發展と宗教倫理とは必然的関連をもつとはいえない。

(3) ヴェーバーが意識的に特定の要因のみをとりあげているのは、彼の方法的欠陥によるものである。

ここでは(3)の方法論上の問題はさておき、(1)および(2)の問題に限定して考察してみることとする。サムエルソンの研究方法には、特定の歴史的现象を歴史的枠組みをはずして比較し、その類似点を強調する傾向がある。元来、時間的・段階的にも空間的・地域的にも異った関連にある事柄を、極めて安易に同質視する方法は、一三世紀から二〇世紀、北欧と南欧・イベリア半島・東欧、ニュー・イングランドと南部などの比較にあらわれている。たとえば、

(1) 「フイレンツェの最高の騎士の家柄の出身であることを大いに誇りにしている」アルベルティは、「人里はなれた荘園生活の理想、祖先への誇りを基にする自負の感情、家族の名譽を決定的な基準や目標として」、人文主義的都市貴族にあてて書かれたこのルネサンス時代の著作」においては、毛織物業と絹織物

製造の問題制前貸経営が推賞されている」が、これと「市民的、中産階級の大衆にむかつて書かれたフランクリンの著作やピューリタンの論説・説教とを比較」することは、極めて非歴史的であるというべきである。修道院内部にもピューリタンにおけると同様な勤労の倫理が見られるという指摘についても然りである。ウェーバーがフランクリンによって「資本主義の精神」を代表させているのは、その著作——例えば“Poor Richards' Almanac”や“The Way to Wealth”や“An Advice to a Young Tradesman”の如き——が広く都市および農村の農民・手工業者・小商人層に流布し、又小市民層のエートスを表現していたからであって、フランクリン自身の思想およびその構成要素を論じているのではない。

(2) 「資本主義の発展」、「経済的進歩」、あるいは「経済活動」とサミュエルソンがいうとき、彼はそこまでのような史実を頭打ちか入っていたのだろうか。以下、いろいろ煩雑にわたるが列挙して見よう。

[A] “in certain of the textile districts” (p. 82)
“merchants and manufacturers” (p. 82)
“extravagant way of life of big merchants, manufacturers or ironmasters” (p. 83)

“the palatial old residence of businessmen in one mercantile city after another—Berne, Geneva, Zürich, Amsterdam, Antwerp, London, Lübeck, Danzig, Stockholm—”

“comparatively well-off people skilled in trade and handicrafts” (p. 115)
“fairly integrated market within a comparatively small area with well developed communication” (p. 117)
“emergence of a fairly broad ‘middle class,’ i.e. of groups with purchasing power adequate to support industrial ‘mass production’” (p. 117)

すなわち、「産業的中産層」「中産的生産者層」とが、質的・範疇的に区別されることなく、ひとしく、「経済活動」の担い手としてとらえられているという点に注意していただきたい。この二つの社会経済勢力は、近世経済史上相対立する二つの体系として把握されていることは周知のとおりである。前者すなわち前期的商業資本(およびトラフィック工業資本)家が、カトリック的であり、宗教に無関心ないし寛容であるのは自明のことであるし、また一九世紀末以降の独占資本家達が宗教的に無関心であることも当然である。彼らの間には生まれた「産業的中産層」がピューリタニズムの担い手であったことも研究史上明らかである。歴史的性格を異にする社会層を峻別した上で、彼らに適合的な経済倫理ないしエートスを解明した場合、サミュエルソンのいわゆる「宗教と経済活動」の関連についてのウェーバーの所説はどのように評価されるかは多言を要しないであろう。「宗教」一般、「経済活動」一般が問題なのではない。史実が複雑なのではなくて、方法が素朴なのである。

“enormous fortunes of the great manufacturers and merchants in England and Netherland”
“millionaires and multi-millionaires of De Neufvilles, Hopes, ... in 18th century Holland, or of Morgan, Carnegie, Rockefeller, Vanderbilt and Harriman in 19th century America” (p. 85)

“textile manufacturing and commerce in the Netherlands and Flanders; ironfounding, saltdrying and international trade in the Hanseatic territories” (p. 103)
“great Dutch merchants and industrialists” (p. 104)
“Many of the largest merchants in Amsterdam were Catholics...” (p. 104)

“its [Amsterdam] richest inhabitant” (p. 105)
“large merchants and industrial entrepreneurs” (p. 105)
“more prominent man and woman” (p. 105)

[B] “it was among the poorest classes that Calvinism first spread” (p. 105)

“most fanatical Calvinists were drawn... from the lower strata of society” (p. 105)
“poorer classes of people in Amsterdam and elsewhere...” (p. 105)
“well-to-do, often of the artisan and tradesman class” (p. 115)

(3) ウェーバー自身は近代西洋文化の特質に禁欲的プロテスタンテイズムの合理主義的倫理がどの様に、又どれ程影響を与えているかを理解しようとしているが、「さらに進んで社会政策的倫理の内容について、すなわち、私的集会から国家にいたるまでの社会的諸形態の組織と機能のあり方についても、明らかにすることではなければならない。その次には、禁欲的合理主義の人文主義的合理主義とその生活理想や文化的影響に対する関係、さらに哲学上ならびに科学上の経験論の発展や技術の発展に対する、また精神的文化諸財に対する関係が分析されるべきであろう。それから最後に、中世における世俗内的禁欲の萌芽から発する禁欲的合理主義の生成とその純粋な功利主義への解体のあとが、歴史的に、しかも禁欲的信仰の個々の普及地域に即して、究明されねばならないであろう。こうして、はじめて、近代文化の創出にあずかったその他の諸要素との関連において、禁欲的プロテスタンテイズムの文化的意義の限度を明らかにすることができる」と述べているところから推して、ウェーバーは更にそこ迄研究の手をのばすことはしなかったか、少くともそういう問題意識のもとにこの問題をとりあげて論じていた事は明らかである。

(4) ウェーバーの研究は、単に歴史的な因果関係の解明にとどまるものではなく、今世紀に入って次第に露わになって来た価値の倒錯・マス化現象、営利の反社会化、生産(力)倫理の疎外化という状況を醒めた眼をもって見すえ、その極限に於て「カリスマ」的原理を再び問題としているのではあるまいか。ウェーバーの研究

究が、面的だとか、精神史観だとかいう類の批判は論外であるが、単なる歴史学的実証的研究の一つとしてか、文化比較のモデルとして理解し受容れるのも正しくないだろう。近代文化の問題性を解明しようとする研究として読まらるべきである。サムエルズの近著のようなレベルでの批判は、ウェーバーの妥当性を、意図に反して証明する以外の意味をもちえないだろう。

- (14) Samuelson, *ibid.*, p. 59.
- (15) Samuelson, *ibid.*, p. 67.
- (16) Samuelson, *ibid.*, p. 149.
- (17) 梶山・大塚訳、下、二四八―一九頁。
(一九六五・二二・二〇)

- 注(4) 丸山真男「戦前における日本のウェーバー研究」(大塚久雄編「マックス・ヴェーバー研究」所収)
- (5) Weber, Max: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, S. 1. 梶山力・大塚久雄共訳、「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」下、二四五―七頁。
- (6) Bendix, Reinhard, *Max Weber: An Intellectual Portrait*, 1960.
- (7) Samuelson, Kurt, *Ekonomi och Religion*, 1957.
- (8) Samuelson, Religion and Economic Action: *A Critique of Max Weber*. (*Harper Torchbooks*, The Academy Library, TB 1131), N.Y., 1964.
- (9) 小原敬士「プロテスタントイイズムとアメリカ資本主義——ひとつのマックス・ヴェーバー批判——」(一橋大学経済研究所「経済研究」第一六巻第四号)二九〇頁注7)、二九二頁。
- (10) Samuelson, *op. cit.*, pp. 1-26.
- (11) Samuelson, *ibid.*, p. 49.
- (12) Samuelson, *ibid.*, p. 49.
- (13) Samuelson, *ibid.*, p. 49.

書 評

アイリリン・B・トイバー著
毎日新聞社人口問題調査会訳

『日本の人口』

Irene B. Tauber, *The Population of Japan*,
Princeton University Press, 1958.

安川 正 彬

今次大戦が終結してのちにわが国で刊行された人口研究の出版物のなかで、人口研究者ならびに人口に心をよせる他の専門家たちを結集した成果として、われわれが誇りうる労作が二つある。一つは南亮三郎他編『人口大事典』(平凡社、一九五七年)の刊行であり、他は、アイリリン・B・トイバー著、毎日新聞社人口問題調査会訳『日本の人口』(一九六四年)の出版である。いまここにとりあげるのは、その後者である。

本書『日本の人口』の訳本ができあがったのは、正確には一九六四年十一月十六日であった。ちょうどその日にはシカゴ大学社会学部長ハウザー(Philip M. Hauser)教授が来日された機会をとらえ

書 評

て、教授を囲んで親しい日本の人口研究者たちが毎日新聞社人口問題調査会で歓談していた。訳本が完成して最初の一冊が届けられたのは、まさにその最中であった。

原著は、連合国軍の日本占領下にあった一九四八年から一九五八年の出版までに一〇年を要したトイバー女史の労作であるが、その後六年の歳月を経て、漸く訳出されたというこの書にまつわるエピソードの数々は、いかに原著が綿密な研究によった労作であり、そしてこの訳出が、いかに入念なそれであったかを端的に物語るのである。

ハウザー教授は日本語を解さないが、しかし訳出されたこの本を手にしたとき、すかさずもらした率直な感想は、「この訳本をもう一度英訳したら、原著にまさる立派な労作ができあがることでしょう」ということであった。こうした外交辞令は洗練された白色人種が好んで使うウィットにはちがいないが、しかしこの本に關するかぎり、ハウザー教授のこの感想は、ウィットにかこつけた実感であったらうと解したのは、その場に居合わせたなかのわたくしだけではなかったであらう。

わたくしがアメリカに滞在した当時(一九六〇―六一年)に、アメリカの人口研究者にとって、この原書は日本(日本の文化・社会と人口)を知るうえでのバイブルであった。そのことは、きつといまもかわらずにその価値を失ってはいないであらうし、そして将来もまたその価値が失われることはないであらう。なぜなら、この書が学術的に高く評価される背後には、つぎのような事情があったから